



家庭の同行どうぎょう 5

ひき出されてゆく生きる力

茂吉(和田重良)

- 穴のあきそうな心を「充たしてくれる」もの
- つないだ手は離さない「信じている」こと
- あそこに帰れば迎えてくれると
- 「あんしんできる」と

足りないものを

かぞ 計算えるな

これっきりの「自分」

親は子どもの成長に満足できないものなの
でしようね。「這えば立て、立てば歩め……」
の如くです。

なかなか親の欲目は「ありのままの子どもの姿」を受けとることはできません。つい願望が入ってしまいます。親の「願い」や「思い」通りに子どもを育てたいのです。もつとすこいのは「夫までも自分の思い通りにならない」と悩んでくる相談も多いのです。

一番手を焼いているのは実は「自分」です。理想を持ったり、願いを持つことは大切なことですが、理想や願いに届かない「自分」を認めることができないのです。

見栄張ったってしょうがない。「現実を認めてから一歩一歩理想に向かう」のがよいのです。そうでなくては理想と想っていることがただの「空想」になってしまうのです。

親は子に「自分の今ある姿からの出発」を伝えたいものです。くだけたで発行している『子ども目めぐり』で言うところ「足踏みして地がため」という言葉になるでしょうか。

人間のスタンダード「普通」

人間に標準(スタンダード)というものがあるでしょうか。

和重正言葉抄

得と損・利口と馬鹿

人は誰でも得が好きで損は嫌いだ。それにもかかわらず案外得を捨て損を稼いでいるのが現実なのだ。何故？それは知恵が問題なのだ。

中学生や高校生がバカなことやって欲求不満を爆発させている。暴走、万引その他の非行、中でも家庭内暴力、校内暴力など。それは大人の目から見たら本人の損になることばかりだ。子どもや青年ばかりではない。大人も同じようなことを本気でやっている。儲けようと焦って損をする。わが子の幸せを願って点取り競争を煽って幸せの衣を着せるべき人間をダメにする。平和を

での悪い子を持った親がよく口にする言葉は「普通であってくれれば」というのです。

「普通」を目指すのはとてもよいことのように思いますが、その「普通」という内容は別々であることが多いのです。平均的？ 大多数に属すること？ いずれにしろ、各自が描いたあまりアテにならない「普通像」であることが多いのです。

勝手に思い描いた「人間のスタンダード」に照らして「足りないもの探し」をします。稼ぎのない人、学歴のない人、身長の高い人、ウダツの上らない人、肩書きのない人、……等と並べてくるとほとんど全部僕に当てはまります。

性格は悪いし、世間にひとつも貢献できないし、嫌われ者だし、人間のスタンダード「普通」からすると足りないものだらけです。どうして「足りない」と思うのでしょうか。「普通」という「標準」が本当にあるのでしょうか。

教育のスタンダード「普通」

先日ある子のお母さんが学校の先生に「こ

のままでは行ける高校がありませぬよ。しつかり勉強させて下さい」と言われたので、子どもにそのまま伝えていいのですか、と相談されました。

ぼくはすぐに「その先生のおっしゃることはぜひぶん無責任なことなので、そんなこと言っておドスのはやめましょう」と答えました。

まず、義務教育が終了したら、高校以上に行く行かないは自由選択です。(そもそも、義務教育だって「行かせる義務」であって「行く義務」ではなかったと思います)なのに「行く高校がない」と言う指摘は変です。

その次に、成績の悪い子に「やればできる。やらないからできない」という決めつけは「誰でも練習すれば100メートルを10秒で走れるようになる」と言うのと同じです。勉強の仕方や内容を個別に指導しなければならぬのではないのでしょうか。「努力しろ」ばかり言っていて「努力の内容」を示していないのです。



守ろう。国を護ろう。と言って準備の拡充に狂奔して平和を破り、国の存立を危くする紳士もいる。それは彼等のソロバンの桁数が少な過ぎるための計算違いなのだ。幸せを願って不幸を招く。平和のために喧嘩仕度をする。みんな知恵が足りないのだ。得をしようとして損をする。これを懸てバカをやめてリコウになろう。

(昭和56年 くだかけ二十四号より)

教育の標準スタンダードがいろいろな形で示されていますが、「性格」「体格」「能力」「点数」などの目安がその子の特徴として示されるより、足りないものをマイナスとして捉えがちになるようにできています。

柔軟に大きく受けとる それは往々にして「有利、不利」が測られるからでしょう。「」が無いから損だ」「」が足りないから不利だ」と思うのです。でもそういう「足りないもの」をバネにしている人たちもたくさんいます。小学五年生くらいの身長しかない長距離走選手が世界陸上に出場していたり、子ども時代に成績ビリだった人が歴史に残る発明をしていたり、というケースだってあります。

貧乏で高校へ行けなかったから「よい仕事」をしている人もいます。たいいていよき指導者(親や教師やコーチ)に出会っています。皆がみんな一流になる必要はありません。「足りないもの」ばかり計算して暗い気持ち

一口メモ

目は、つい足りない方へ行ってしまいます。「人のやる気」を奪ってしまうのは、「期待のたっぷり入った」想を押しつけてそれに届かぬ、足りないものばかりを定してしまうから……

でいるよりも、柔軟に大きく受けとめて、一つ一つ、一歩一歩できるところから「努力の道」を切り拓いて行けるように応援できたらいいですね。自分のことも、子どものことも「今、ここ」から出発し、「今、ここ」を生き切っていければ最高、最善ですね。なかなかできませんが。